



Title	『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章における伯牛の病臥位置について
Author(s)	杉山, 一也
Citation	中国研究集刊. 2023, 69, p. 89-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章における伯牛の病臥位置について

杉山 一也

はじめに

『論語』雍也篇「伯牛有疾」章に、「牖^{まど}自^{より}其の手を執る」という句がある。孔子の弟子である冉耕（字は伯牛）が重い病氣にかかり、孔子がそれを見舞った際に、直接会わずに窓から手を執って伯牛の病氣を悲しんだ、という話である。

かつてこの箇所用の字問題で、中井履軒『論語逢原』の「牖」字について報告をしたことがある（注1）。それは、以下のような問題であった。

『日本名家四書注釈全書』所収中井履軒『論語逢原』の該当箇所において、「牖」字の誤植があった。『論語逢原』の該当箇所は、以下のようになっている。（見やすくするため、当該字に傍点を付した。原文は返り点などが付されているが、ここでは省略する。）

○伯牛有疾。子問之。自牖^{（まど）}執其手。曰。亡之。命矣夫。斯人也。而有斯

疾也。斯人也。而有斯疾也。

包咸曰。牛有惡疾。不欲見人。故孔子從牖^{（まど）}執其手也。

惡疾者。皆不欲近于人。於所尊敬尤避隱。蓋自慚其醜惡臭穢。而恐爲其所惡也。

病者居北牖^{（まど）}下。君視之。遷南牖^{（まど）}下。見于儀禮註疏。論語註疏引之。誤作南牖^{（まど）}。集註沿之。

古人堂室之間。隔以牖^{（まど）}。而戸在東。又鑿牖^{（まど）}爲牖^{（まど）}于西。以通明。故爾雅曰。牖^{（まど）}戸之間。謂之辰。顧命曰。牖^{（まど）}間敷重席。然則南牖^{（まど）}亦非無牖^{（まど）}。但不當妄改舊文耳。或者遂云。南有牖^{（まど）}無牖^{（まど）}非也。

室中牖^{（まど）}下。即是奧矣。爲主人之常處。病臥宜亦在于此。何必北牖^{（まど）}。居北牖^{（まど）}者。蓋禮疏之杜撰。不可從。（注2）

しかし、『日本名家四書注釈全書』が底本としている、『論語逢原』（明治四十四年、松村文海堂。明治四十五年、東陽堂。以下「文海堂本」と略称する。）では、以下のようになっている。（識別しやすくするため、当該字

にそれぞれ傍点を付した。原文の返り点は省略する。）

○伯牛有疾。子問之。自牖執其手。曰。亡之。命矣夫。斯人也。而有斯疾也。斯人也。而有斯疾也。

包咸曰、牛有惡疾、不欲見人、故孔子從牖執其手也、

惡疾者、皆不欲近于人、於所尊敬尤避隱、蓋自慚其醜惡臭穢、而恐爲其所惡也、

病者居北牖下、君視之、遷南墉下、見于儀禮註疏、論語註疏引之、誤作南牖、集註沿之、

古人堂室之間、隔以墉、而戸在東、又鑿墉爲牖于西、以通明、故爾雅曰、牖戸之間、謂之扆、顧命曰、牖間敷重席、然則南墉亦非無牖、但不當妄改舊文耳、或者遂云、南有墉無牖、非也、

室中牖下、即是奧矣、爲主人之常處、病臥宜亦在于此、何必北牖、居北牖者、蓋禮疏之杜撰、不可從、（注3）

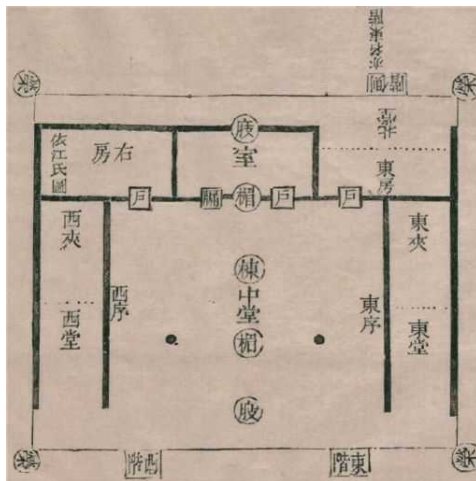
問題は、「牖」「牖」「墉」の三字である。『日本名家四書注釈全書』本ではすべて「牖」字であるが、底本の文海堂本では「牖」「墉」の二字を使い分けており、またそれらの用字は中井履軒自筆本も同様である。つまりは『日本名家四書注釈全書』本の誤植である。それぞれの字義については、「牖」は「まど」の意であり、「墉」は「かべ、へい」の意である。「牖」は「牖」「墉」ともに通じる異体字である。

誤植の問題は以上のとおりである。前稿においては、中井履軒のそれぞれの用字の使い分けがどのような意味になるのかについて論じた。この文字の使い分けについて要約すると、以下のものである。

室の北には、「墉（かべ）」はあるが「牖（まど）」はない。一方、室の南には「墉（かべ）」があり、そこに「牖（まど）」が作られている。注疏などが「北牖（まど）の下に居る」というのは間違いである。（以後は傍点を付さない。）

さて本稿においては、「牖」「墉」字の解釈に限定せず、それに関連した問題について検討したい。すなわち、孔子が見舞った際の伯牛が病臥していたのは室中のどの位置か、そしてそれはなぜかということについて、中井履軒がどのように解釈していたかという問題である。

まず、室の状況について説明する。張惠言『儀礼図』巻上の「大夫士房室図」では、次のようになっている。（注3）



張惠言『儀礼図』巻一「大夫士房室図」（部分）
（国立国会図書館蔵）

中央の「堂」の北に「室」がある。「室」の南壁の東寄りに「戸」があり、西寄りに「牖（まど）」がある。孔子が伯牛の手を執ったのは、この「牖（ま

ど)「越しだと考えられる。

次に、伯牛のいた位置についての諸説を見てみる。

孔子が見舞いに来たが、伯牛は病氣のために面会をためらった。そこで孔子は窓越しに伯牛の手を執った。このことについては、諸注釈の間で異論はない。しかし、孔子が見舞った際の伯牛の病臥位置については、いくつかの説がある。

一 病臥位置に言及しない注釈

まず、その病臥位置に言及しない注釈として『論語注疏』がある。『論語注疏』の解釈は以下のとおりである。何晏の集解は、包咸の説を引き、ただ以下のように言うのみで、孔子と伯牛との位置関係については言及しない。

牛惡疾有れば、人を見るを欲せず。故に孔子牖従り其の手を執るなり。

(注5)

孔子が牖^{まど}越しに伯牛の手を執ったことから、伯牛が室内に、孔子が室外にいることは明らかである。またそれに対する邢昺の疏でも、以下のように敷衍するのみである。

伯牛惡疾あれば、人を見るを欲せず。故に孔子之を問ふとき、牖従り其の手を執るなり。(注6)

邢昺の疏は「孔子が伯牛を見舞った時に」という句を付け加えているだけ

で、両者の空間的位置関係についてのさらなる言及はない。ただし、孔子は牖^{まど}越しに手を執ったのだから、その時伯牛は室の南側にいたはずであり、それを明文化していないだけであるとも言える。

二 病臥位置を室の北側から南側に移動させたとする注釈

次に、伯牛の病臥位置に言及している注釈のうち、通説だと考えられる説を紹介する。すなわち、「室の北側に病臥していたのだが、孔子が見舞ったので南側に移動した」とする説である。次の皇侃の説がそうである。

皇侃『論語義疏』の解釈は、以下のとおりである。

「牖」は南窓なり。君子疾有らば、北壁の下に寐ねて東首す。今師來る、故に南窓の下に遷出して、亦た東首す。師をして戸従り床北に入り、南面することを得しむるなり。孔子其の惡疾あれば人を見るを欲せざるを恐れ、故に戸に入らず、但だ窓上に於て其の手を執るなり。

(注7)

ここでは室内における位置関係について述べられている。伯牛は北壁の下に病臥していたところ、孔子が見舞いに来たので南窓の下に移動し、頭を東に向けたとする。そうすることで、孔子は伯牛が臥している牀の北側に立つて、南面することができる。しかし孔子は伯牛がその惡疾のため人に会いたくないだろうと心配して室に入らず、南窓の窓越しに手を執った、というのである。

ここでまず問題になるのは、なぜ伯牛は室の北側に病臥していたかという

ことである。

病人が室の北側で病臥することについては、たとえば、『礼記』喪大記第二二に「〔病^{やまひ}疾^{いへ}なるときは〕寝^いぬるに、北牖の下に東首す。」とある(注8)。そして、その鄭玄の注は以下のようにいう。

病者は恒に其の墉下に居る、或いは「北墉の下」と爲す。(注9)

前稿ではまさにこの「墉」字と「牖」字との問題について報告したのであるが、引用した鄭注どおりの「墉(かべ)」字のままで解釈すれば、病人は通常、室の北墉の下に臥すということになる。

では、この『礼記』喪大記の鄭注に対する孔穎達の疏はどうなっているだろうか。

「病者は恒に北牖の下に居る」と云ふは、『士喪』下篇に「北牖の下に東首す」と云ふ。是れ恒なるときは北牖の下に在るなり。若し君視ざるの時は、則ち恒には東首せず、病者の宜しき所に随ふ。此れ熊氏の説く所なり。今謂へらく、病者恒なるときは北牖の下に在りと雖も、若し君來視の時は、則ち暫時南墉の下に移嚮して東首し、君をして南面して之を視るを得しむるなり。(注10)

ここで孔疏は『儀礼』「士喪礼」下篇(すなわち「既夕礼」)を引用して、次のように解釈する。すなわち、病人は普段は北牖の下に臥すことになっている。そして、君主が見舞いに来た時でない限り東を頭にするとは限らず、「どちらの方角に頭を向けるかについて」それは病人の都合による(熊安生

の説)。しかし、君主が見舞いに来た時は、暫時南墉の下に移動して東を頭にし、君主が病人に対して南面できるようにするのである。孔疏は以上のように解釈している。ここで孔疏は、北は「牖」、南は「墉」と使い分けており、孔疏が引用している『儀礼』経文も「北牖」としている。しかしながら、藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』(いわゆる阮元本)『儀礼』既夕礼の原文では「北墉」となっている。

なお、この「君主が見舞いに来た時には、室の南に移動する」という説は、本稿が議論の対象としている『論語』雍也編「伯牛有疾」章についても、多くの注釈において同様に説かれており、通説となっている。ところで、この室内の病臥位置問題に関連した章が、『論語』郷党篇にある。この場合は、孔子自身が病氣になった時の話である。

疾ありて、君之を視るとき、東首し、朝服を加へ、紳を拖く。(注11)

この包咸注に、以下のようにある。

包曰く、夫子疾あれば、南牖の下に處り、東首し、其の朝服を加へ、紳を拖く。(注12)

そして邢昺の疏では、次のようにいう。

病者は常に北牖の下に居るも、爲し君來視せば、則ち暫時南牖の下に遷郷し、東首す。君をして南面して之を視るを得しむるなり。(注13)

ここでも、室の北側に病臥していた者が、もし君主が見舞いに来た時には南側に移動して、君主を南面させるとしている。その点では前述の皇侃の説と同様である。

以上のように、室内の病臥位置について、病者は室の北側に病臥するのだが、もし君主が見舞いに来た時は室の南側に移動するという、皇侃や孔穎達などの説に従った注釈が一般的である。

さて、再び「伯牛有疾」章に戻り、この章についての朱子の説をしてみる。孔子が見舞いに来たため、伯牛が北側から南側に移動したという解釈は、朱子も同様である。朱子『論語集注』の注釈は、以下のとおりである。

「疾有り」とは、先儒以て癩と爲す。「牖」は、南牖なり。『禮』に、「病者は北牖の下に居る。」といふ。君之を視るときは、則ち南牖の下に遷る。君をして以て南面して己を視るを得しむるなり。時に伯牛の家は此の禮を以て孔子を尊ぶも、孔子は敢て當たらず、故に其の室に入らず、而して牖自り其の手を執るは、蓋し之と永訣するなり。(注14)

朱子の主張も基本的に通説に沿っている。病人は室の北牖の下にいる。君主がその臣下を見舞う時、病人は南牖の下に移動する。なぜなら、北牖の下にいたままでは見舞いに来た君主が北面することになってしまうからである。そこで、病人は南牖の下に移動し、君主に南面させるのである。

そこで、伯牛の家ではこの礼に沿って孔子を遇しようとした。しかし孔子本人はそれを辞退して室に入らず、ただ南牖から伯牛の手を執って別れを告げた。これも、孔子を南面させるために伯牛が北牖の下から南牖の下に移動

した、とする解釈である(注15)。しかし、孔子は君主を遇する形式を辞退して入室しなかったのだとしている。

ここで「室」における「北墉」と「北牖」との問題を整理しておきたい。『儀礼』既夕礼「死於適室」の注「疾時處北墉下」について、胡培翬『儀礼正義』は以下のように結論づけている。

正義曰はく、注「疾ある時は北墉の下に處る」とは、陸氏『釋文』は「庸」に作りて「牆也、本亦た墉に作る」と云ふ。張氏『識語』は『釋文』に従ひて「庸」に作る、李氏『集釋』も同じ。宋嚴州刻本、明徐本、敖氏、『通典』、『通解』、俱に「墉」に作る。毛本「牖」に誤る。

又た注「死而遷之當牖下」は、嚴本、徐本、『釋文』、『通典』、『集釋』、『通解』、楊氏、敖氏、俱に「當」に作る。毛本「南」に誤る。阮氏『校勘記』に云ふ「疏内に「北牖」「南牖」を稱する者一に非ざるに據れば、兩つながら通ず可きに似たり」と。今案するに、『校勘記』の説、非なり。下篇『記』に云ふ「寝ぬるに北墉の下に東首す」と。又た云ふ「牀・第を設けて牖に當つ」と。鄭俱に此に本づきて説を爲せば、「墉」「當」に作る者はなるを知る。『禮經釋例』に曰はく、「室は堂の後に在り、南に牖有るも、北は惟だ牆のみにして、牖無きなり。士大夫以上皆同じ」と。(注16)

結論を言えば、北は「墉」が正しく、「南牖」は「當牖」が正しい。室の北側には「牖」はなく、「墉」がある。室の南側には「墉」も「牖」もあるが、ここは「牖」に作るべきで、「死而遷之當墉下(死すれば之を遷して牖下に當つ)」が正しいとする。

以上に述べてきたように、「牖」の下か「墉」の下かはともかく、普段は室の北側に病臥していたとしても、もし君主が見舞いに来た場合には南側に移動するとする説が、伯牛有疾章の解釈としても一般的である。

さらに詳細な注釈を施している、劉宝楠『論語正義』の解釈をしてみる。

劉宝楠『論語正義』も、その他の注釈と同様に移動説を採っている。『論語正義』のこの箇所についての解釈は、以下のとおりである。

案ずるに、古人平時の寢處は皆奥に在り、病ある時始めて北墉の下に遷る、卽し君疾を視るときも亦た然り。毛氏奇齡謂へらく「東首西面するは、君の室に入りて西立東面すると、正に相對することを得」と。若し然らば、病者北墉の下に遷り、而して『論語』「牖自り其の手を執る」と稱すれば、包咸謂へらく「牛惡疾有り、人を見るを欲せず、故に南牖の下に遷り、夫子は牖の外自り就きて之に問ふ」と。此れは是れ変禮なり、故に『論語』特に文もて之を記す。(注17)

劉宝楠の解釈は以下のようなものである。室ではふだん「奥」に寝るが、病氣の時には北側の墉の下に遷る。それは君主が見舞いに来た時も同様である。毛奇齡は「頭を東側にして「体を起こして」西側を向くと、室に入つて来た君主が西側に立つて東側を向くことで、顔を向かい合わせることができる」といつている。もしそうなのであれば、病人は「病氣のために」北側の墉の下に遷つたはずであるが、しかし『論語』は「牖越しにその手を取つた」といつている。そこで包咸は「伯牛は惡疾を患い、人と会いたがらず、南側の牖の下に遷つたからこそ、孔子は牖の外側から彼を見舞つたのである」としたのである。これは「変礼」であるからこそ、『論語』はことさらこれを記録

したのである。

以上、通説であると考えられる、北側から南側への移動説を紹介した。

三 病臥位置は室の北側にあり、伯牛が歩いて南側に移動したとする注釈

『論語』雍也篇伯牛章の該当箇所についての鄭玄の注は残っていない。しかし、『論語』郷党篇「疾君視之」章の鄭注は残っており、そこには以下のようにある。

疾あるとき、室中の北墉の下に寝ぬ。(注18)

つまり、鄭玄の説では「病臥する時は室の北墉の下に病臥する」ということである。ただし残っている鄭玄注では「南側に移動する」という注釈は見られない。

この説について、華喆『礼是鄭学』では以下のように言っている。

冉耕(伯牛)は北壁の下に病臥し、人に会おうとはしなかった。だからこの室の戸は閉まっていて、孔子が堂に上った後も冉耕は牀を南壁の下に移動する必要がなかった。この時、孔子は冉耕と交流を果たそうとしたのだが、唯一の方法は南窓の下だけだった。そこで孔子は戸の位置から南窓の下まで移動して、室内に手を差し伸べたのである。この時、冉耕は孔子が室内に手を差し伸べたのを見て、やむを得ず自分で牀の上から降りて、南窓の下まで歩いて行って、孔子の手を執つたのである。(注19)

ここでは、鄭玄は伯牛が北側に病臥したままであったと考えたのではないかと推測している。さらに、南窓から差し伸べられた孔子の手を執るために、伯牛は「歩いて」南側に移動したのだろうと推測している。

最後に、中井履軒『論語逢原』の説を紹介する。履軒は「もとより室の南側に病臥していた」とする説である。

四 病臥位置はもとより室の南側にあったとする注釈

履軒は『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章注釈の第四項で、以下のように言う。

室中の牖下は、即ち是れ奥なり。主人の常處と爲せば、病臥するとき宜しく亦た此に在るべし、何ぞ必ずしも「北牖」ならんや。「北牖に居る」

とは、蓋し禮疏の杜撰なり、従ふ可からず。(注20)

この「牖下」は「北牖の下」ではなく、「奥」にあたるとしている。「奥」とは室の西南隅で、主人の常に居る位置であり、伯牛もそこに病臥していた。その南壁には「牖」があるので、「牖」の外の堂とつながっている。

この「奥」については、『礼記』曲礼上に「人の子爲る者、居るに奥に首たらず」とあり、その鄭注は「室中の西南隅、之を奥と謂ふ」と言っている(注21)。室内においては西南隅の「奥」が尊位なので、父と同室に居るときは尊位である「奥」には座らないとする。

履軒の解釈は以下のようにだと考えられる。すなわち、病者は牖下に病臥す

るが、それは室の北側ではなく西南隅である。もともと北側に病臥していた伯牛が、孔子が見舞いに來たから南側に移動した、というわけではない。伯牛は孔子の面会を拒んだが、病臥している傍らに牖があったため、孔子はその南牖から伯牛の手を執ることができたのだ、という解釈である。

この位置関係については、前引の『論語』郷党篇の「君之を視るとき、東首す」の箇所についての履軒の注釈に、詳しく述べられている。

室中の位は東嚮を以て尊しと爲す。病者若し南首北首して東方に在らば、則ち戸の出入を妨ぐ。西方に在らば、則ち東嚮して君に臨み不敬と爲す。若し西首せば、則ち君の出入するに、病者の足君に向く。故に自然に東首せざるを得ず。其の北牖の下に在りて、常處を避くるは、君をして室中の尊位に就かしむるなり。伯牛の若きは則ち臥して常處に在り。故に孔子牖自り其の手を執るを得たり。此の節と大いに逕庭有り、併論す可からず。(注22)

履軒の説は以下のとおりである。

室中では東向きが尊位であるが、病人が室の東側に臥すと北枕でも南枕でも戸の出入りの妨げになる。病人が「病臥せずに」西側にいたならば、見舞いに來た君公に東向きに望むことになるので不敬となる。もし西枕で臥すと、君公が室を出入りするときに、病者の足が君公に向くことになってしまう。ゆえに自然と東枕にせざるを得ない。(君主が見舞いに來た時に)病人が「北牖」の下に居るのは、常に居る所(奥)を避けて、君公に室中の尊位(西南の位置)に就いてもらうためである。しかし伯牛の場合は、常に居る

所（西南隅）に臥していたので、孔子は牖^{まど}から手を執ることができたのである。伯牛の場合については、君主を尊位に就かせる礼と併論することはできない。

この箇所の説明の仕方は、病臥位置とその方向について身近で現実的な問題として論じていると言える。履軒は「歴史主義、文献実証主義であると言うよりも、実際の経験にもとづく実感」による「健全な常識や世の変わらぬ人間の姿や心の自然な事実、そういうものに基づくという意味での率直な読解」（注23）を求めている。

また履軒は、雍也篇「伯牛有疾」章において、伯牛は孔子の面会を辞退したが、孔子がその心情に配慮して別れを告げたとして、以下のように述べる。

孔子疾を問ふも、伯牛は蓋し辭して見ざるなり。孔子強ひて室に入らんと欲せば、則ち伯牛の心を苦傷す。見ずして還らんと欲せば、則ち師と弟子との今生の訣別にして、又た忍びざること有るなり。是に於てか、牖^{まど}自り其の手を執りて告別し、其の面を視ざるなり。此れ中^{ちゅう}を藪^{はく}りて宜しきに適ひたり、人情を盡くす者なり。（注24）

履軒はここでも、孔子や伯牛の心情を読み取って身近で現実的な問題として解釈をしている。

最後に、履軒が伯牛の病臥位置について異説を唱えた根拠について述べる。

室内における尊位について、『礼記』曲礼上には以下のようにある。

席南郷北郷ならば、西方を以て上と爲す。東郷西郷ならば、南方を以て上と爲す。（注25）

つまり、室内に南向きと北向きの席があったならば、どちらの席も西側が上位となる。またもし東向きと西向きの席があったならば、どちらの席も南側が上位となる。ゆえに室内の上位は西南の位置になる。

室中の尊位については、履軒は『史記雕題』巻七「項羽本紀」の「鴻門の会」での席次に対して次のように彫題を書いている。

堂上の位、堂下に對する者は、南嚮を尊と爲す。堂下に對せざる者は、唯だ東嚮のみを尊と爲す。復た南嚮を以て尊と爲さず。（注26）

すなわち、一方が堂上、一方が堂下にいる場合は、堂上にいる者が南面することと尊位となる。しかし、両者がともに堂上にいる場合は、東向きが尊位となるとしている。

そのことは、『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章の注釈でも、同様に述べられている。

堂上之位、堂下に對する者は、南面を以て尊と爲す。室中の位は、東郷を尊と爲す。未だ室中に南面を尊ぶを聞かざる也。今室中に南面して己を視るを以て君に待するの禮と爲す、亦た異ならずや。（注27）

おわりに

中井履軒の「伯牛有疾」章の解釈は、礼の規定によって伯牛が南側に移動したとする包咸、皇侃、朱子などの従来の注を否定した解釈である。すなわ

ち、伯牛はもとと室の西南に病臥していたのであり、孔子が見舞いに來たから南側に移動したのではない、とする独特な説である。この説は、この章についての従来の解釈に縛られない、室中の尊位との整合性を考えた解釈であると言える。

注

(1) 杉山一也「中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章の「牖」字について」(二〇一九年三月、日本論語教育学会に提出)。

(2) 関儀一郎『日本名家四書注釈全書』論語部四(東洋図書刊行会、大正十四年)。

(3) 竹田健二「『論語逢原』の記念出版と中井木菟麻呂」(『中国研究集刊』玉号(総五十号)、二〇一〇年)によれば、この本は明治四十四年の懷徳堂記念祭に伴う記念出版であり、『論語逢原』の校正を担当したのは中井木菟麻呂である。

(4) 張惠言『儀禮圖』卷一「大夫士房室圖」から加工(国立国会図書館デジタルコレクシオン <https://dl.ndl.go.jp/pid/2599297/1/9-10> 三年二月七日閲覧)。

(5) 何晏注・邢昺疏『論語注疏』(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所収)。

伯牛有疾、

馬曰「伯牛、弟子冉耕。」

子問之、自牖執其手、

包曰「牛有惡疾、不欲見人、故孔子從牖執其手也。」

曰「亡之。」

孔曰「亡、喪也。疾甚、故持其手曰、喪之。」

命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而有斯疾也。」

包曰「再言之者、痛惜之甚。」

【疏】「伯牛」至「疾也」。○正義曰、此章孔子痛惜弟子冉耕有德行而遇惡疾

也。伯牛、冉耕字也。有疾、有惡疾也。「子問之、自牖執其手」者、自、從也。伯牛惡疾、不欲見人、故孔子問之、從牖執其手也。「曰、亡之」者、亡、喪也。疾甚、故持其手曰「喪之」。「命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而有斯疾也」者、行善遇凶、非人所召、故歸之於命、言天命矣夫。斯、此也。此善人也、而有此惡疾也。是孔子痛惜之也。再言之者、痛惜之甚。○注「馬曰、伯牛、弟子冉耕。」○正義曰『史記』弟子傳曰「冉耕、字伯牛」、鄭玄曰「魯人」。○注「包曰、伯牛有惡疾」。○正義曰、惡疾、疾之惡者也。『淮南子』云「伯牛癩」。

(6) 注5参照。

(7) 皇侃『論語義疏』(中華書局、二〇一三年)一三四頁〜一三五頁。

伯牛有疾、伯牛、弟子冉耕字也、魯人。有疾、時其有惡疾也。

馬融曰、「伯牛、弟子冉耕也。」

子問之、孔子往問伯牛之疾差不也。

自牖執其手、牖、南窓也。君子有疾、寐於北壁下東首。今師來、故遷出南窓下、亦東首、令師從戸入於床北、得面南也。孔子恐其惡疾不欲見人、故不入戸、但於窓上而執其手也。

苞氏曰、「牛有惡疾、不欲見人、故孔子從牖執其手也。」

曰「亡之、亡、喪也。孔子執其手而曰喪之、言牛必死也。」

孔安國曰、「亡、喪也。疾甚、故持其手曰喪也。」

命矣夫！亦是不幸之流也。言如汝才德實不應死、而今喪之、豈非稟命之得矣夫。矣夫、助語也。

斯人也而有斯疾也！斯人也而有斯疾也！」斯、此也。言有此善人而嬰此之惡疾、疾與人

反、故歎之也。再言之者、痛歎之深也。

苞氏曰、「再言之者、痛惜之甚也。」

(8) 鄭玄注・孔穎達疏『禮記注疏』喪大記(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所収)。

寢東首於北牖下。

謂君來視之時也。病者恒居其墉下、或爲北墉下。○「首」手又反、下注「南首」同。「牖」音酉、舊音容、下注「牖下」放此。「墉」音容。

【疏】○「注謂君」至「墉下」○正義曰、知「謂君來視之時也」者、案『論語』鄉黨云、「疾、君視之、東首加朝服」。此云「東首」、故知是君來視之時也。以東方生長、故東首鄉生氣。云「病者恒居北墉下」者、『士喪』下篇云、「東首于北墉下」、是恒在北墉下也。若君不視之時、則不恒東首、隨病者所宜。此熊氏所說也。今謂病者雖恒在北墉下、若君來視之時、則暫時移嚮南墉下、東首、令君得南面而視之。

(9) この鄭玄注については阮元の校勘記がある。

「或爲北墉下」、閩監毛本同。岳本同。嘉靖本同。惠棟校宋本、無「北」字。衛氏『集說』同。按『釋文』出「爲墉」、是亦無「北」字。

(10) 注8参照。なお校勘記に従い「移嚮南墉下」を「移嚮南墉下」に改めた。

(11) 何晏注・邢昺疏『論語注疏』鄉黨篇(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所収)。

疾、君視之、東首、加朝服、拖紳。

包曰、「夫子疾、處南牖之下、東首、加其朝服、拖紳。」「紳」、大帶。不敢不衣朝服見君。

【疏】「疾君視之東首加朝服拖紳」○正義曰、此明孔子有疾、君來視之時也。

拖、加也。紳、大帶也。病者常居北牖下、爲君來視、則暫時遷嚮南牖下、東首、令君得南面而視之。以病臥不能衣朝服及大帶、又不敢不衣朝服見君。故但加朝服於身、又加大帶於上、是禮也。

(12) 注11参照。

(13) 注11参照。

(14) 朱熹『論語集注』雍也篇(『四書章句集注』中華書局、一九八三年)八七頁。

伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰「亡之、命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而

有斯疾也。」

夫、音扶。○伯牛、孔子弟子、姓冉、名耕。有疾、先儒以爲癩也。牖、南牖也。禮、病者居北牖下。君視之、則遷於南牖下、使君得以南面視己。時伯牛家以此禮尊孔子、孔子不敢當、故不入其室、而自牖執其手、蓋與之永訣也。命、謂天命。言此人不應有此疾、而今乃有之、是乃天之所命也。然則非其不能謹疾而有以致之、亦可見矣。○侯氏曰、「伯牛以德行稱、亞於顏、閔。故其將死也、孔子尤痛惜之。」

(15) ただし、朱子『論語集注』では「北牖(まど)」の下から移動するとしているが、後の諸注釈で「北墉(かべ)」の誤りだと指摘されている。

(16) 胡培翬『儀禮正義』士喪禮(『皇清經經續編』卷七二三)。

正義曰、注「疾時處北墉下」、陸氏『釋文』作「庸」云「牆也、本亦作「墉」」。張氏『識語』從『釋文』作「庸」、李氏『集釋』同。宋嚴州刻本、明徐本、敖氏、『通典』、『通解』俱作「墉」。毛本誤「牖」。又注「死而遷之當牖下」、嚴本、徐本、『釋文』、『通典』、『集釋』、『通解』、楊氏、敖氏俱作「當」、毛本誤「南」。阮氏『校勘記』云、「據疏內稱北牖南牖者非一、似可兩通」。今案、『校勘記』之說非也。下篇記云、「寢東首于北墉下」、又云「設牀第當牖」。鄭俱本此爲說、知作「墉」「當」者是。『禮經釋例』曰、「室在堂後、南有牖、北惟牆、無牖也。士大夫以上皆同」。

(17) 劉寶楠『論語正義』雍也篇(『皇清經經續編』卷一〇五七)。

案、古人平時寢處皆在奧、病時始遷北墉下、即君視疾亦然。毛氏奇齡謂「東首西面與君之入室西立東面正得相對」。若然、病者遷北墉下。而論語稱「自牖執其手」者、包咸謂「牛有惡疾、不欲見人」、故遷於南牖下、夫子自牖外就而問之。此是變禮、故論語特文記之。

(18) 王素編著『唐寫本論語鄭氏注及其研究』(文物出版社、一九九一年)一二二頁。
疾時寢室中北墉下也。

(19) 華詰『礼是鄭学』(生活・読書・新知三聯書店、二〇一八年)六八頁。

冉耕臥病北牖之下、不愿见人、故此室户关闭、孔子登堂之后、冉耕自然没有移床南牖下的必要。这时孔子与冉耕想要达成交流、唯一的途径就是在南牖之下、于是孔子从户的位置行至南牖下、伸手进入室内。此时冉耕见孔子伸手入内、只得自己从床上下来、走到南牖之下、与孔子执手。

(20) 中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章。

室中牖下、即是奥矣。爲主人之常處。病臥宜亦在于此。何必「北牖」。居北牖者、蓋禮疏之杜撰、不可從。

(21) 鄭玄注・孔穎達疏『禮記注疏』曲禮上(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所収)。

爲人子者、居不主奥、坐不中席、行不中道、立不門。

室中西南隅謂之奥。

(22) 中井履軒『論語逢原』鄉黨篇「君賜食」章。

室中之位、以東嚮爲尊。病者若南首北首在東方、則妨于戸之出入。在西方、則東嚮臨君爲不敬。若西首、則君之出入、病者之足向君。故自然不得弗東首也。其在北牖下、避常處、使君就室中尊位也。若伯牛、則臥在常處、故孔子得自牖執其手。與此節大有逕庭、不可併論。

(23) 加地伸行『加地伸行著作集Ⅱ 日本思想史研究』(研文出版、二〇一五年)三八一〜三八三頁。

(24) 中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章。

孔子問疾、伯牛蓋辭而弗見也。孔子欲強入于室、則苦傷伯牛之心、欲不見而還、則師弟子今生之訣別、又有不忍也。於是乎、自牖執其手而告別、不視其面也。此斟酌而適乎宜、盡於人情者也。

(25) 鄭玄注・孔穎達疏『禮記注疏』曲禮上(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所収)。

席南鄉北鄉、以西方爲上、東鄉西鄉、以南方爲上。

(26) 中井履軒『史記雕題』卷七「項羽本紀」十三葉表。

堂上之位、對堂下者、南嚮爲尊。不對堂下者、唯東嚮爲尊。不復以南嚮爲尊。

(27) 中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章。

堂上之位、對堂下者、以南面爲尊。室中之位、東鄉爲尊。未聞室中尊南面也。今室中以南面視己、爲待君之禮。不亦異乎。

杉山一也(すぎやま・かずや)

一九六一年生まれ。岐阜協立大学経済学部准教授。専門は中国思想史。共著に『教養としての中国古典』(ミネルヴァ書房、二〇一八年四月)、『白川静を読むときの辞典』(平凡社、二〇一三年一〇月)など。

